



『フクロウ 地球上で最も謎めいた鳥の科学』 「はじめに フクロウの正体」より

フクロウの何が私たちをそこまで魅了するのだろうか。3万年前、フランスのショーヴェ洞窟にその姿が描かれた。古代エジプトの象形文字ヒエログリフやギリシャ神話にも登場する。日本のアイヌの人々には神と崇められ、ピカソは版画やエッチングの題材にした。ハリー・ポッターシリーズの小説の中では手紙を配達する役目を負い、マグルの世界と魔界のあいだを行き来する。フクロウは私たちの言語に根を下ろし、ことわざに頻出する。怒りっぽい人、頑固な人、他人に協力しない人は「まるでフクロウのよう」と言われる。夜ふかしする人は「夜のフクロウ」、賢い老人は「賢い老フクロウ」だ。

フクロウとペンギンで人気を二分する地域もあれば、フクロウを悪魔の化身とする地域もある。フクロウには二面性があるのだ。優しいけれども死をもたらすことがあり、可愛いかと思うと荒くれ者にもなる。凶暴な面があるのにひょうきんにもなる。ときにはお茶目な道化になって、人のカメラを盗んだり帽子を失敬したりする。丸い顔、大きく見開かれた目、全体の姿形は何かとても親しみを感じさせる一方で、私たちとはまるで異なる生き物、私たちが暮らす世界の影の部分の思い起こさせる。たいていのフクロウは夜行性で人の目に触れることもあまりなく、私たちは夜中の「ホーホー」という独特の鳴き声(コール)でその存在を知る。飛ぶ姿はピロードの上を歩くようになめらかで、漆黒の闇の中で獲物を狩る能力は人に畏敬の念を抱かせる。

多くの文化では、フクロウはなかば鳥、なかば精霊と見なされ、現実と空想の世界を隔てる壁を軽々と越える。知識と知恵の象徴とされることもあれば、不運、病気、あるいは死を呼ぶ者と恐れられることもある。預言者あるいは使者と考えられることも多い。ギリシャ人は、戦場の上空をフクロウが飛んだときには勝利が待つと信じていた。古代インドの民間伝承では、フクロウは知恵と預言の象徴とされた。ナバホ民族(訳註 14~15世紀から北米に住む先住民族)にも同様の民間伝承がある。ナバホ民族の神話に登場する創造主のナアイエネイズガニは、未来を知りたければ預言者であるフクロウの声に耳を傾けなくてはならぬ、と人々に語った。アステカ人はフクロウを冥界の象徴と考え、マヤ人は冥界「シバルバー」からの使いと考えた。シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』では、死が迫っていることを知らせるフクロウが日中に姿を

見せたとき、シーザー暗殺の首謀者だったカスカは恐怖におののく。「夜の鳥が居すわった、/真昼だというのに、市場の上で、/『ホーホー』としきりに鳴いた」

ジェニファー・アッカーマン著 『フクロウ 地球上で最も謎めいた鳥の科学』 鍛原多恵子訳
樋口垂紀監修 日経ナショナル ジオグラフィック 2025年



曾我二直菴 《松鼻図》(部分) メトロポリタン美術館